

# イエズス会人文主義教育と女子教育修道会

## — 聖心会を中心に —

桑原直己

### 【1】はじめに

近代に成立した女子教育修道会は全体的にイエズス会教育の影響を受けている点が指摘されている。本稿では、これら女子教育修道会とこれによる女子教育に対してイエズス会教育、特にその人文主義的教育が与えた影響の具体的諸相を概観することとしたい。そのために、まず一六—一七世紀という近代初頭における女子教育修道会の展開の中で課題となっていた問題点、および女子教育における「学校」成立の経緯を概観する。その上で、一九世紀になってからイエズス会的な修道スタイルおよび学校教育の理念を本格的に女子教育の分野において採り入れた聖心会および聖心会学校での教育をモデルケースとして、そこでのイエズス会教育の影響、特にその人文主義的教育の実態に検討を加えることとする。

### 【2】近代に向けて—女子教育共同体の展開

#### (一) 一六・一七世紀における女子教育共同体の展開

一四世紀にイタリアで始まったいわゆる「ルネサンス」の人文主義は、古典古代（ギリシア、ローマ）文化の復興を志向する文化運動であり、一五世紀末にはアルプス以北の地域にも伝えられ、やがて西欧各国に広まった。人文主義にもとづく教育は、まず一六世紀前半における宗教改革運動と結びついた。ルターおよび彼に続く宗教改革者たちは、プロテスタントイイズムと人文主義とに基づき学校制度をもたらし、男子学校のみならず女子のための学校をも設立し、新興産業市民層の教育に対する要求に応えようとした。他方、人文主義とカトリック教育とを結びつけたのは言うまでもなくイエズス会である。イエズス会は男子教育の分野において特に中等教育学校を設立することによって実績を示した。女子教育の分野においても、一六世紀の終りから一七世紀初めにかけて、フランスおよび近隣諸国で新しい修道会等による試みが展

開した。フランソワーズ・スリラヴェーグは、この時代にヨーロッパで誕生した女子教育共同体として、次の七つの共同体をあげている<sup>(1)</sup>。

1. Les Ursulines (聖ウルスラ会、一五九二年創立)
2. Congrégation de Notre-Dame (ローレーンのコングレガシオン・ドゥ・ノートルダム会、一五九七年)
3. Les Filles Dévotes de Sainte Agnès (聖アグネスの会、一六〇〇年)

4. La Compagnie de Notre Dame (ポルドーのノートルダム修道院) 現聖マリア修道女会、一六〇六年)

5. Les Ursulines d'Anne de Xainctonge (ドールの聖ウルスラ会、一六〇六年)

6. La Visitation Sainte Marie (聖母訪問会、一六一〇年)

7. Jesuitesses (メアリー・ウオードの「女子イエズス会」、一六一一年)

以上、スリラヴェーグが枚挙したこれらの女子教育に従事した共同体それぞれの特色について、以下に主として羽場勝子に<sup>(2)</sup>依拠しつつ概観したい。

#### (1) 聖ウルスラ会

北イタリア出身のフランシスコ会第三会員アンジェラ・メリチ(一四七四—一五四〇年)は一五三五年、イタリアのブレッシアの地で少女たちの教育のため、女性殉教者聖ウルスラの名をとつ

たウルスラ会という共同体を創立した。当初ウルスラ会は共同生活をする修道会ではなく、両親の家や家族のもとに住み続ける虔な乙女たちによる在俗の団体であり、「在俗修道共同体」の一種の先駆と言える。彼女たちは共通の生活規則、共通の祈り、礼拝、定例の集会、そして共通の使命によって結ばれていた。しかし、同じ服装をし、私的誓願が勧められた時点で修道会に近い特徴も示していた。その後枢機卿カルロ・ボロメオのもと、ミラノの地で女子教育のための初等学校を任せられその地で発展した。しかし、一五九二年にアヴィニョンの地で開始されたフランスの共同体は共同生活を営んだため修道会と見なされ、その主流は結局禁域(盛式誓願<sup>(3)</sup>)を立てた修道者が守る、外部の者をそこに入れることも、自らがそこから出ることもない空間)を持つ修道院で暮らしながら女子教育に従事するようになった。後述するように、ウルスラ会は教育に特化した「学校」という空間の中で、専門的に教育職を志す召命をアイデンティティとし、イエズス会の教育方法を大幅に採り入れたことが注目される。

#### (2) ローレーンのコングレガシオン・ドゥ・ノートルダム会

宣教と教育とを結びつけたドイツのプロテスタント教会に刺戟され、神に奉獻した女性による女子教育の必要性を確信した皇帝領ローレーンの司祭ピエール・フリエの構想を、アリス・ル・クレールが実現する形で一五九七年に創立された。やはり禁域を

もたない生活様式が問題となり、一六〇六年、禁域をもつことが命ぜられる。後述するように、禁域と学校とを両立させるためには寄宿学校という形態がとられた。寄宿学校の生徒は在学中は学校内に留まることが建前であったが、この会の学校では生徒に一時期家庭で生活させていた点が問題となった。一六一七年、通学校閉鎖を条件に、単式誓願による「コングレガシオン」から盛式誓願と禁域による正規の修道会 (Ordre) とされた。しかし、交渉の末、「臨時」という名目で通学校の開校を許された。この学校は「民衆学校」として教区全体の民衆教育に貢献した。会員は教育に従事する特別の誓願を立て、イエズス会に倣い共同体が国籍・地域を越えた一体性を保つために中央集権的な総長制を採った。

なお後になって、この修道会から分かれたトロワのノートルダム修道会の一外部会員であったマルグリット・ブルジョワ(一六二〇—一七〇〇年)は、カナダという新天地において、禁域をもたない女子修道会(コングレガシオン・ドゥ・ノートルダム・ドゥ・モンレアル、一六七六年)を設立することとなる。今日、日本で教育活動に従事している「コングレガシオン・ドゥ・ノートルダム会」はこのコングレガシオン・ドゥ・ノートルダム・ドゥ・モンレアルである<sup>(4)</sup>。

### (3) 聖アグネスの会

聖アグネスの会とは、一六世紀末、オランダで人々がカルヴァ

ン派に改宗してゆくのはカトリック教育の欠如によるとの認識に立ち、カトリック的女子教育のためには女性の教師が必要であると考えた人々の要望に応えた女性たちのグループが一六〇〇年に公認されたものである。イエズス会が男子の為にしているように女子の為に教育したいと考えた彼女たちは修道会を形成することを望まず、あくまでも「信徒の女性グループ」の身分に留まり続けることにより、学校教師としての生き方を追求する道を選んだ。しかし、後に様々な困難に直面し解散することとなる。

### (4) ノートルダム修道会(聖マリア会)

高名な人文主義者ミシェル・ドゥ・モンテーニュの姪にあたるジャンヌ・ドゥ・レストンナク(一五五六—一七四〇年)によって、カルヴァン派の拠点ボルドーの地において、カルヴァン派と対峙する中で教育修道会として創立され、一六〇七年に教皇から認可を受けた。ジャンヌはイエズス会をモデルとする新しい修道生活を目指した。「イエズス会は、一五七五年にフランスでの二番目の家と学校をボルドーに開いていた。ジャンヌの弟はそこで学び、後にイエズス会士となっていたので、ジャンヌはイエズス会を若い時から知っていた。彼女は観想修道院の修道形態が新しい使徒的修道会に合わないことを体験から学び、イエズス会の会憲・会則を自分の修道院に適応させた」<sup>(5)</sup>。

ノートルダム修道会は、現在日本でも「聖マリア会」の名称のもとに活動している。生徒をも禁域の中に取り込む全寮制の寄宿

学校というスタイルで、禁域制と学校教育活動を両立させる道を切り開いた点が注目し値する。修道会としての靈性および学校における教育内容についてはイエズス会から強い影響を受けている。後述する聖心会は、この修道会を一つのモデルとしていると言われている。

#### (5) ドールの聖ウルスラ会

前述(1)の通り、ウルスラ会は禁域制を導入した。しかし、デヴィジョン生まれのアン・ドウ・セントンジュ(一五六七—一六二一年)がイエズス会教育に做った女子教育のための修道会を構想して、ドールの地でバザンソンの大司教フェルナンデルの保護のもとに、無償の女子学校を開いた。ウルスラ会の規則を受け入れたがイエズス会のシステムと教育方法とに做う道を追及し、伝統的な「修道院」の形式はとらず「貞潔と定住」の誓願のみで十分である、とした。このためフランス国内の他のウルスラ会とは別組織となり、セントンジュの死後、一六二三年に、トリエント公会議以降最初の単式誓願による女子修道会として認められることとなる。

#### (6) 聖母訪問会

フランソワ・ドウ・サル(一五六七—一六二三年)の指導のもとに一六一〇年設立されたこの修道会は、「禁域か、活動か」との二者択一を迫られた結果、当初志した教育活動を断念して基本的に観想修道会としての道を歩むこととなる。

#### (7) メアリー・ウオードによる修道会(「女子イエズス会」)

宗教改革渦中の一五八五年、イギリスに生まれた熱心なカトリック教徒であったメアリー・ウオード(一五八五—一六四五年)は、オランダの地でイギリス人の同志たちと、イギリスから連れてきた少女のための寄宿女学校と町の子どものための女学校を開いて活動していた。一六一一年、女子のためにイエズス会と同じ会を作ることを使命として自覚し、イエズス会の会則を女性として可能な限り採用し、禁域をもたない総長制の修道会を作ろうとした。しかし、周囲から理解されず、結局反対勢力のために一六三一年には会の活動が禁止され、メアリー自身も一時ミュンヘンの修道院に幽閉される。やがて誤解を解いた教皇により解放され、メアリーは一六三九年にイギリスに戻った。彼女の会は後継者によって修道会として整備され、一七〇三年ようやく認可される。

#### (二) 近代初頭における女子教育共同体の特徴と困難

以上、一六一—一七世紀における女子教育共同体のいくつかの試みを概観してきたが、共通する特徴を二点挙げる事ができる。一つは、イエズス会とその教育からの影響である。もう一点は女子修道会に課せられた「禁域」への要求との格闘である。

スリラヴェーグが枚挙したこれら七つの女子教育共同体の内、六つの共同体が直接イエズス会員の指導を受けている。また組織的にも総長制をとるなど、イエズス会に倣おうとする傾向は、女子教育修道会の中に強く流れ続けていたことが分かる。特に(7)のメアリー・ウォードによる試みは、実際「女子イエズス会」という通称で呼ばれたりするが、一七世紀初頭という時期は余りにも早すぎた。修道会とその学校とにイエズス会のシステムを導入する本格的な試みは、本稿が中心的に取り上げる一九世紀初頭に成立した聖心会を待たなければならなかった。

修道靈性史全般の傾向として、中世盛期から近代へと時代が下るにつれ、修道者たちは禁域の中で外界から隔絶された生活を送るベネディクト型の修道バラダイムを離れ、社会に進出してゆく形での「使徒職的使命」に生きる機動的スタイルの修道バラダイムへと移行してゆくプロセスを見ることが出来る。学校教育という活動は、そうした社会進出型の使徒的使命の典型的なあり方を示している。

男子修道者に関して言えば、すでに中世盛期に成立した托鉢修道会が「定住」の原則を放棄して「人的結合」による組織としての修道会への道を切り開いていたが、近代に成立したイエズス会はその方向をさらに進め、聖務日課の共誦をも廃止してメンバーの個人的行動の可能性を広げると共に、終身職の総長制などに見られる中央集権的な組織を備えてさらに機動的なスタイルをと

るに至っている。

しかしながら、女子修道者にとつては事情は異なっていた。女子の修道者は正規の修道者である限り、依然「禁域」を守らなければならなかった。しかも、トリエント公会議の復古的風潮の中でその要求はむしろ厳しくなっていたのである。さらには女子修道会がイエズス会のような中央集権的な、いわば国際組織を形成する道は困難を極めていた。

これらの困難は、修道女が「学校教師」として生きる上での制約となっていた。そのため修道女たちは、学校教育事業を断念するか、正規の修道者であることを断念するか、というディレンマに立たされていた。前述した修道会をみると「教育と禁域は両立できない」とする会(コングレガシオン・ドウ・ノートルダム会)、両立させようとする会(ノートルダム修道院)、教育などの活動を諦めて観想修道院に移行した会(聖母訪問会)など、多様な対応形態を見ることが出来る<sup>6)</sup>。そうした中で注目されるのは、禁域と学校教育事業とを両立する道としての「寄宿制学校」というスタイルである。

### 【3】 女子教育における「学校」の成立

ところで、女子教育がイエズス会に倣い、人文主義的な教育を取り入れるためには、まず、「学校」という空間が女子教育の分

野で確立することが前提となる。以下に、ベネディクト型修道バラダムでの修道院における教育から女子「学校」教育が成立し、本格的にイエズス会的な人文主義教育を女子教育が取り入れる素地が形作られるまでの歴史の変遷を概観することとしたい。

## (一) ベネディクト型修道院における教育

「修道院が貴族の子女を預かる」という形態の修道院教育は、女子教育に限られることなく、修道者が教育という社会的使命を担う古典的なあり方を示していた。ベネディクト系修道院に生活する盛式誓願を立てた教会法上正規の修道士、修道女たちは、外界から隔てられた禁域内で、祈り、労働、そして勉強からなる日課の中で生きていた。まず最初は、修道生活を志す者、ないしは両親の意向により修道生活に向けられた子どもが幼少期から修道院に預けられて教育を受けた。しかし、やがて子どもが最終的に修道生活に入るか否かにかかわらず、単に「良質な、聖なる教育」を受けさせる為だけのために子どもが修道院に託されるようになる。こうして男女を問わず修道院は教育の機能を担うようになった。

ベネディクト系修道院での教育活動は、あくまでも生活の中でその一部をなす形で営まれていた。教育活動はあくまでも修道生活の本質をなすものではなく、その付随的な要素であるに過ぎな

かった。従って、近代に起こった教育を目的として組織された修道会のように、カリキュラムや教授法に関して組織的な努力を注ぐことはなかったし、今日の我々が「学校」として思い描くような教育活動のために特化された空間が修道院内に設けられていたわけでもなかった。女子修道院においては、学業の教授は一切外部からの教師に委ねられていた。修道女は、たとえ自らが豊かな教養と教育者としての資質とを備えていたとしても、教科を教えることは無かった。修道女たちが関わったのはいわゆる宗教教育のみである。修道女たちによる教育は、彼女たちが子ども達と生活を共にすることにより、生活の実地場面において子どもたちを教え導くことであった。ベネディクト系修道院は「生活そのもの」の中で、いわば「意図せざる」教育力を発揮していたのである<sup>(7)</sup>。

## (二) ウルスラ会学校—女子教育における「学校」の成立

ウルスラ会は、明確に教育を目的として結成された最初の女子共同体であった。当初ウルスラ会は修道会ではなく、私的誓願のみを立てる在宅の女性信徒の共同体であったが、一六世紀末、フランスのアヴィニオンに導入されたウルスラ会共同体は共同生活を送るようになり、修道会となったことも前述の通りである。女子修道会としてのウルスラ会の最も基本的な特徴は、教育職を

自分たちの修道者としてのアイデンティティの中核に位置づけた点にある。ウルスラ会の修道女たちは、「清貧・貞潔・従順」という通常の修道三誓願に加えて、「青少年の教育への献身」を誓う第四の誓願を宣立した。

ウルスラ会の教育課程を構成していた読み書き、地理、歴史、国語、ラテン語、裁縫、音楽等の授業を担当したのは原則として修道女たちであり、外部からの教師を依頼するのは、偶々特定の教科に適任の修道女が居ない場合に限ったことであった。従って、ウルスラ会の修道女には、各自の適性に応じて、教育の専門家として努力することが求められた。そのため、修道女としての養成においても、教育者としての訓練に力点が置かれた。教師としての力量の訓練は、初期養成期間中に限られることなく、実地の学校現場に配属された後まで、校長が教職に関する養成および指導の責任を担い、現職教員である修道女達に対してきめ細かい指導を行った。

また、従来のベネディクト系修道院における教育とは異なり、ウルスラ会にとつて教育活動は修道生活における副次的、或いは偶発的産物ではなかった。ウルスラ会教育は明確な「学校」という空間と、組織的な教科教育の日課のもとに実施されており、修道院そのものがその「学校」の運営を目的としていた。修道女たちによる祈りと神との一致は、教育という任務を内面から支えるものとして位置づけられ、生活の一切は学校生活を中心として組

織されていた。

ウルスラ会教育においては、イエズス会教育の影響のもとに、人文主義教育の理念にもとづく一貫した教科教授法をとることが心がけられていた。たとえば、基礎学力を確実に定着させる為に反復練習を重視する授業法、健全な競争心を学習意欲に向けての動機づけとするための作文コンクールなどがそれである。

ウルスラ会修道院学校は、フランスに導入されるや瞬く間に全土に拡まった。一八世紀初頭には、フランス国内においてウルスラ会修道院学校は数百校を数えるに至っている。この普及には、その教育における力と、地域に応じて多様なあり方をとりうるウルスラ会の柔軟な構造が力となっていた。

### (三) 王立サン・シール学校

聖心会学校を中心に考える時、ウルスラ会教育と聖心会との間に位置し、ウルスラ会における女子教育の方法を聖心会に伝えたと存在として、王立サン・シール学校がある。

サン・シール学校は、ヴェルサイユ宮殿に近いサン・シール村にあつた小さな私塾に注目したマントノン夫人（フランソワーズ・ドービーニエ、一六三五—一七一九年）が、一六八二年、ルイ一四世に進言した結果、その庇護下に置かれて困窮貴族層家庭の子女の教育をこととする「王立」学校となったものである。マン

トノン夫人は一時期世俗化された教育を志し、その結果失敗も経験している。彼女自身は、ウルスラ会の修道院学校で教育を受けたが、サン・シール学校創設の当初においては、彼女は修道院教育は「堅苦しすぎる」と考え否定的な見方をしており、サン・シール学校を修道院とは無縁の形で運営し始めた。教員はすべて教育に熱意をもつ一般信徒の女性を採用した。また、「すぐれた伴侶養成を目的とする貴族の少女の教育」を説いた『女子教育論』で有名なフェヌロン（一六五一一七一五年）もまた、マントノン夫人の協力者となった。国王の保護下、恵まれた環境のもとにサン・シール学校は成果を上げる。

しかし、まさにその時点でマントノン夫人は苦い失敗を経験する。修道靈性という歯止めを持たないサン・シール学校では、その教育が成果を上げるにつれて、生徒と教師の間に驕慢の風が蔓延していった。そして、その問題性が噴出する事件が起こる。それは、学校演劇で「スター」となった生徒と、これに殺到した求婚者たちによる騒動であった。

またこの時期、宗教教育に関しても問題が発生した。生徒たちの間にスペインの神秘家モリノスに端を発する「静寂主義（キエティスム）」と称する異端的な神秘思想が流行する。前述のフェヌロンはこの静寂主義に関与していた。こうした宗教的な独善に陥ったのも、結局は修道靈性による守りの欠如に由来する驕慢と同根の問題だったと言える。

マントノン夫人はこうした状況に対応して路線を変更した。ウルスラ会を始め、サン・モールの幼きイエス会、聖母訪問会等の教育活動の分野で実績ある修道女会に援助と指導とを求めて修道会「聖ルイ会」を創設し、サン・シール学校の教師団とした。以後、サン・シール学校は、驕慢に陥る危険を孕んだ自由闊達の気風と、堅苦しさに陥る危険を孕んだ修道院教育との調和を実現し、一世紀余にわたってカトリック女子教育の一つの模範を示すこととなる。

サン・シール学校における教育の特徴として、特に記憶力と会話能力との開発に力を入れていた点が指摘される。サン・シール学校では、マントノン夫人が自らの教育的資質にもとづいて生徒たちとよく「会話」を交わすのが常であったという。年長者と会話する能力を身につけることは、生徒の知性と教養とを高める上で極めて実践的な効果を示していた。これは、「生きた人文主義教育」と表現することも出来よう。

#### 【4】 聖心会―近代女子教育修道会の一つのモデル

以上を踏まえ、イエズス会の教育を本格的に女子教育の分野に取り入れたモデルとして聖心会および聖心会学校を取り上げ、そこでのイエズス会教育の影響、特にその人文主義的な教育内容について具体的に概観することとしたい。



## (二) 修道会としての聖心会

聖心会の出発は、一時解散させられていたイエズス会復興の動きと連動しており、復興イエズス会と文字通り手を携えて歩み始めている。創立者、マドレーヌ・ソフイー・バラ(聖マクダレナ・ソフイー・バラ、一七七九—一八六五年)<sup>(8)</sup>は、イエズス会系の教育を受けた兄ルイ・バラから幼少の頃より厳しい教育を受け、若くして当時における最高度の教育を受けた男性に匹敵するだけの知性と教養とを身につけた才媛であった。やがて彼女は、当時解散中であったイエズス会の再興を志していた「信仰の霊父会」のメンバーであるジョセフ・ヴァランと出会い、やはりイエズス会の霊性および教育理念を再び世に出すことを志していたレオノール・ドウ・トゥルネリの構想になる「イエスの愛子会(聖心会の前身)」に参加し、アミアンの地で修道生活に入った。弱冠二二歳で修道院長に、さらには二五歳で修道会の総長に就任した。新修道会は一八一五年に総会を開催して会憲を樹立し、修道会の名称も現在にまで続く「聖心会」と定められた。聖心会は、その会憲においてイエズス会式の中央集権的な組織化を達成した。

しかし、あくまでも正規の修道会であろうとした結果、禁域制を受け入れた。これを当時の教会からの不本意な「押しつけ」と

解するか、聖心会自身が進んで採用したものと解するか、という点については議論が分かれているようであるが、伊庭澄子は後者の立場をとっている<sup>(9)</sup>。伊庭は、「生活を通しての教育」というベネディクト系修道パラダイムの長所を吸収し得たことが、聖心会が「禁域」を持ったことの利点であると考えている。教育活動と禁域制との両立の問題に関しては、【2】(一)(4)で前述したジャンヌ・ドウ・レストンナクによるノートルダム修道会のスタイルに倣い、寄宿制学校を主体とするという形を採り、この伝統は第二バチカン公会議まで受け継がれていた。

聖心会会憲の研究者ジャンヌ・ドウ・シャリ<sup>(10)</sup>は、創成期の聖心会が女子修道会として自己形成してゆく上で採用したモデルとして前節で触れた二つの修道会を挙げている。その一つはジャンヌ・ドウ・レストンナクによるノートルダム修道会である。先述のとおり、寄宿制学校という形態において、禁域制を守る正規の女子修道会のあり方と、学校教育を通しての使徒的活動とを統合するスタイルを、聖心会はこの修道会から学んでいる。もう一つの修道会は、サン・シール学校の聖ルイ会である。聖心会はこの修道会、というよりはサン・シール学校から学校教育の模範を得た。サン・シール教育は学習内容においても高い水準を示しており、その学習計画(Plan des études)は、ほぼそのままの形で後の聖心会会憲にとり入れられている。高度な宗教教育、国語(II

フランス語)、歴史、地理、数学、お稽古事、手仕事、そして最終学年の生徒のため、個人々の需要に応じて設けられる家政学が学習の内容であった。

ただし、サン・シール学校の失敗を教訓として、聖心会学校においては、たとえば外国語教育などについても、「高慢と虚栄心を育てるようなものは一切遠ざけ」「イエス・キリストの宗教の特色である単純と謙遜の精神に基いていなければならない」とされている。

しかしながら、聖心会教育の源泉として何よりも重要なのは、イエズス会教育の伝統であった。イエズス会学校が『学事規程 *Ratio studiorum*』という統一的な学校教育の基準を有していたように、聖心会学校も『学習指導要綱 *Plan d'études*』という基準を策定していた。聖心会がその初期『学習指導要綱』を策定するにあたっては、イエズス会の伝統から直接指導を受け、女子教育というよりはむしろヨーロッパ男子教育の伝統である人文主義古典教育からその本質的精神を汲んでいる。無論、先述の通りイエズス会からの影響は、近代において教育に関わるあらゆる修道会に及んでおり、たとえばウルスラ会もイエズス会のさまざまな教育手法をとり入れていたが、ウルスラ会員たちがイエズス会教育から受けた影響は部分的であった。これに対して、聖心会教育においてイエズス会の教育伝統が果たした役割は、単なる「影響」以上のものであった。伊庭によれば、「聖心会は、イエズス会の教

育、即ちルネサンス期に遡り、具体的にはパリ大学の古典人文主義を踏まえる、男子教育、*Ratio Studiorum* に凝縮、代表されるイエズス会教育の一切を、理念、目的から教科の構成教授／学習法時間割の細目に至るまで、そっくりそのまま採用し、自校の教育を作り上げた」<sup>(1)</sup>のである。

先述のとおり、マドレーヌ・ソフィー・バラがイエズス会の再興を志す「信仰の霊父会」のジョセフ・ヴァランと出会い、レオノール・ドゥ・トゥルネリの構想になる「イエスの愛子会」に参加し、アミアンの地で学校教育を使命とする修道生活に入り、院長、そして修道会の総長となったことから聖心会は出発する。またアミアン修道院に隣接するオラトワール街には、信仰の霊父会の学校もあった。聖心会にとって最初の学校となるこのアミアンでの学校創設の経緯からも、地理的な近さからも、初期聖心会学校が信仰の霊父会とその教育とから影響を受けたのは極めて自然な成り行きであった。

しかし聖心会は、そうした経緯による以上に、自分たちの積極的な選択としてイエズス会教育を採り入れ、自分たちの学校教育の性格、具体的な内容、手法の源泉としていった。伊庭は、バラがはつきりと意図してイエズス会教育に倣うことを選択したのは、自身が受けた教育のためだと指摘している<sup>(2)</sup>。ソフィー・バラに教育を施したのは兄であるルイ・バラであった。ルイ自身はパリのコレージュ・ド・カートル・ナシオンで学び、自身が受け

た教育をそのままの形で妹に施した。それは、パリ大学に発するイエズス会の伝統を色濃く伝える人文主義教育を目ざす男子教育の内容であった。やがて成人し、教育に心を向け始めたソフィーが直面したのは公教育学校の混沌であった。彼女は、そこに欠けており、それゆえに必要とされている課題に応え得る最良のものは、自らが吸収したイエズス会教育の伝統のうちにある、と看取したと考えられる。

## (1) 聖心会『学習指導要綱』

誕生したばかりの聖心会学校は、その教育活動に関する指導者として、信仰の霊父会のメンバーであるニコラ・ロリケ神父を得た。聖心会にイエズス会教育の精髓を教えたのはこのロリケであった。

まずロリケは、新設女子校が立ち上がった一八〇二年から一八〇四年に至る二年間にわたり、週に二回、記録によれば一〇時一五分から一一時一五分まで聖心会を訪れ、教員養成講座を開いた。さらに、一八〇四年一〇月、ロリケはアミアンの学校のために『学習指導要綱』を執筆・作成して、聖心会学校のために教育内容と教育手法とを示し、その基本的な方向を決定した。

途中一八〇六年に一時的に指導要綱が改訂され『教育指導要綱』と称される時期がある。しかし、一八一〇年に再び改訂され

た際には名称が『学習指導要綱』に戻ったことが象徴するように、最初の一八〇四年版の路線に復帰し、それ以降その路線が揺らぐことは無かった。『学習指導要綱』はその後、ソフィー・バラの存命中だけでも一八二〇年、二六年、三三年、五二年、六四年と数次の改訂を重ねたが、一貫してそのガイド・ラインとなったのは、最初の一八〇四年におけるロリケ版であった。

聖心会の歴史上一八一〇年が重要なのは、この時、『学習指導要綱』が聖心会の総会 (Conseil general) によって採択、承認されたことである。この時点から、指導要綱は、『アミアン学校用』の「暫定」版ではなく、聖心会の全体、すべての聖心会学校に対して拘束力をもつ文書となった。この拘束力は、一九七〇年、第二バチカン公会議の要請に従って開かれた聖心会臨時総会に至るまでの一六〇年間、継続した。教育活動に実績を挙げた多くの修道会の中でも、自会の教育を規範文書の形で示したのは聖心会のみであるとされる<sup>(13)</sup>。

ロリケが最初の『学習指導要綱』を執筆した際、彼は二人の人物の影響を受けている。一人は、大学における教育の理想と方法論とを、全六巻からなる著作『教育論』として著した、コレージュ・ロワイヤルの修辞学教授にしてパリ大学の総長でもあった罗兰である。もう一人は、一七世紀、パリ大学、クレルモン・コレージュの教授であったイエズス会士、ジュヴオンシー神父であった。罗兰に代表されるパリ大学の教育伝統とジュヴオンシー

に代表されるイエズス会教育の伝統とは教育理念と教育手法において一致していたことが知られている<sup>(14)</sup>。ロリケが、アミアンにおける聖心会学校のために『学習指導要綱』を作成するに当たり、「第一の師」としたのはジュヴォンシーであった。つまり、ロリケは聖心会学校のために目指したのは、自分たち「信仰の霊父会」の学校におけるのと同様に、イエズス会教育を再現することであったということになる。

この時、ロリケがイエズス会教育の原典として何を用いたのかという点については諸説がある。オリアリー<sup>(15)</sup>によれば、それは完成した形での『イエズス会学事規程 *Ratio studiorum*』よりも古い、一五四一年—一五八〇年におけるパリ、イエズス会コレージュの『学習指導要綱 *Praxis et Ordo studiorum*』であったと言っている。カレルのより新しい研究によれば<sup>(16)</sup>、典拠はやはり一五九九年版の『イエズス会学事規程』であるとされる。伊庭は、「恐らく一五九九年本を底本として用い、より古い、且つパリ版の一五四一年—一五八〇年版をも併せて参考としたということであろう<sup>(17)</sup>」としている。いずれにせよ、ロリケはイエズス会の教育規則を直接に参照して、聖心会『学習指導要綱』の基礎としたのである。

### (三) 聖心会学校の教育内容

最後に、主として伊庭に依拠しつつ当時の聖心会学校の具体的

教育内容の一端を概観し、これと『イエズス会学事規程』に見られるイエズス会教育<sup>(18)</sup>との共通性を概観したい。

#### (1) 「秩序 Order」の原理

イエズス会の教育伝統は「明確な目的意識を持ち、手段の合目的有効性を求める周到な行き方」をとっていた。それは「秩序の原理」と呼ばれる。「秩序の原理」とは「明快な優先順位に従ってカリキュラムを構築することであり、細部に迄及ぶ、特定の教授法であり、授業内での時間配分、学校生活全体の組み立てであり、逐年的に展開する学習内容」<sup>(19)</sup>を意味していた。

『イエズス会学事規程』では、学年ごとで学ぶべき教育内容の順序を一貫して詳細に定めることにより、緻密に計画された形で自由学芸を学ぶよう定められている。秩序が教育活動の全てに滲透していなければ必ず混乱が生じ、混沌の中で組織としての成果をあげることは難しいというのがイエズス会教育の基本的考え方であった。それゆえに、イエズス会教育では「秩序」を学校教育の當みにとって不可欠の構成要因であると考えていた。この方式は、今日的に言えば徹底した「系統学習主義」ということになり、生徒自身に広範囲の科目群から選択させるアメリカ起源のカリキュラムとは正反対の教育方法である。学校教育における秩序の原理は、個々人としては能力の程度やタイプを異にした教師たちが「集団」として最も効率的に働き、首尾一貫した成果を挙げることが意図していた。

こうした「秩序」にもとづく教育方法論は一見教師や生徒の獨創性を損なうように思われるが、むしろ逆であつてこれを支えるものであつた。秩序の原理は、教師が経験の蓄積によつて有効性が立証された枠組みのルールに従うことによつて、試行錯誤や無駄な動きによる時間とエネルギーとの浪費を避けて効率的に教育活動を展開することを意味しており、教師に余裕を与えるからである。学習・教授活動から無駄を省いた分、教師には創意工夫と生徒のために注ぐべき時間とエネルギーとが確保される。

秩序の原理にもとづいて、初級から最上級までのカリキュラムが一貫して構成され、授業中の学習活動に与えられた時間配分や教授法は定型化される。しかし反面、教材の扱いなど具体的な教え方については、教師による自由裁量の余地はむしろ大きかつた。さらに、イエズス会教育は生徒たち一人一人に向き合いケアする努力 (*cura personalis*) を基本とするものであつた。イエズス会教育においては、教師は多くの時間を個人指導に費やしており、個々の生徒を知悉したイエズス会員たちは一人一人の生徒の個性、適性に合わせて指導を行った。このことを可能としたのも、秩序の原理による効率的な教育方法であつた。聖心会学校も、こうしたイエズス会教育の基本的性格を受け継いでいた。

## (2) 言語教育

創設期の聖心会学校において、「授業」のための時間は、一日あたり二時間半である。この二時間半のうち一時間半は、連日「国

語」(＝フランス語)の授業にあてられた。授業全体に与えられた時間の少なさからして、連日一時間半という贅沢な時間量は、いかに言語教育が重要視されていたかを物語っている。この言語教育は「文法」と呼ばれているが、今日の我々が理解する狭義の「文法」にとどまるものではなく、中世にまで遡る「自由七科」に起源を有し、一七世紀初頭の大学改革を通して整つた教育システムとなつた古典人文教育における「文法」を意味している。その内容は初歩の読み書き初歩に始まり、狭義の文法、作文、古典テキストの読解、文学的分析・鑑賞にまで及んでいる。それは、言語能力と教養とを全体的に鍛え上げるための組織的教育システムであつた。

イエズス会学校でも同様であつたが、当時の聖心会学校における「学年」の概念は、今日の我々が当然視している年齢に対応したそれとは異なつていた。各学年ごとに秩序の原理によつて漸進的に組み上げられた学習内容が指定されており、それぞれに達成規準が設定されている。生徒が特定の学年(クラス)に進級や編入が許されるのはその規準にかなうことが条件であつた。

ロリケによるアミアン学校の学習指導要綱によれば、「国語」の学習は以下の学年構成となつている。

「四級」「三級」「二級」は文法学習を行う。「二級」から文学及び神話の学習に進む。「一級」では文法のレッスンは無

くなり、「上級」では修辞学を学ぶ。(20)

この学年構成は『イエズス会学事規程』が規定している下級コレギウム(中等教育学校)のそれと平行している。すなわち、「四級」「三級」「二級」はイエズス会コレギウムにおける「下級文法学年」「中級文法学年」「上級文法学年」に、「一級」は「人文法学年」、「上級」は「修辞学学年」に対応している。

「文法」の学習は、常に作文を伴っていた。言語についての理解度は、自らが表現することによって確認されるものだからである。聖心会が目指していた人文主義的古典教育における言語教育が目指す最終的な到達目標は弁論能力の獲得、つまり修辞学の習得に置かれていた。この点はイエズス会の下級コレギウムの教育目標と正確に一致している。正確かつ適切にものごとを語ったり書いたりして、聞き手や読み手に理解させ、相手の心を動かすことが、この徹底した言語教育の目的であった。この思想は、サン・シール学校でマントノン夫人が「会話」による教育によって目指していたものと共通しているとも言える。

毎日、午前中の一コマ全部を用いてなされた国語の授業内容と各種活動に割りふられた時間は次の通りである。

「レッスンの朗唱…一五分」「読み…一五分」「宿題直し…一〇—一五分」「解説…三〇分」「宿題の出题」。

「読み」と「宿題直し」の間には、息抜きを兼ねて、短い習字が入る。(21)

これは、一七世紀、イエズス会学校の創立された当初から行われてきた「パリ・モード」と呼ばれる授業方法におおむね準拠するものであった。

「レッスンの朗唱」と称されるものは、単に暗記して来たものを朗唱することではない。それは前日読んで学習して来た宿題文の内容を、簡潔にまとめ、三、四分内で明晰に話すことであった。煎じ詰めれば、修辞学が目指す、「よく話す」すべての習得に向けての学習であり、話す内容は勿論のこと、話のスタイル、話し方のマナー、発声等にも心を届かせることが求められた。(22)

ただし、ナシヨナリズムの時代を反映して、言語教育はラテン語、ギリシア語を対象とするのではなく、母国語教育であった。ラテン語教育はまだ重視されていたが、国語(フランス語)教育のための予備学とされていた。バラ自身は、ギリシャ・ラテンの古典にもとづく厳正な人文主義教育を受けており、個人的には「国語化」の動きは不本意であったようである。聖心会学校でもラテン語の学習はあることはあったが、直接ギリシャ・ローマの

古典に触れる機会は減少していた。こうした傾向を危惧したバラは、聖心会学校のカリキュラムにおいて、神話、歴史の学習を強化することによって教養の弱体化を補うことを意図したと言う。

### (3) 学習の方法

反復学習、総合的学習などによって、知性を鍛える教育に力が入れられていた。反復学習の際には、生徒の数人からなるチームを作り、一人の生徒をチームリーダーとして他の組と競わせるなどといった方法がよく用いられていた。このことは、『学事規程』が示すイエズス会学校における「コンツェルタテオ」のような競争的学習方法を連想させる<sup>(23)</sup>。

聖心会学校における総合的学習方法の重視の伝統を印象づけるエピソードがある。一八五二年版指導要綱策定に際して、「クラス担任が、自クラスに関して全ての主要教科の授業を担当するのか、あるいは、専科制に変更するのかということが」問題となった。結論はクラス担任が全ての主要教科を担当するという従来システムの堅持であった。たしかに個々の担任教師には不得手な科目分野があるかもしれないが、生徒たちに総合的な学習態度を育成することの方が、より重要であると判断したのがその理由である。

### (4) 宗教教育

聖心会の会憲は、教科一般については概略を述べるに留まっている。これに対して、宗教教育に関しては、目的、手法、教授上

の留意点などについて、かなり詳細にわたって、明確に語っている。この点も、『イエズス会学事規程』と共通している。『イエズス会学事規程』においても手厚い宗教教育が指定されているが、当然そのすべては「靈操」に基づいている。聖心会学校における宗教教育も「靈操」が基本に置かれていると言える。

聖心会会憲も、宗教教育に従事する者の基本的な心得として、「何よりもまず、生徒たちが信仰においてしっかりとした者になる努力を傾ける」<sup>(24)</sup>よう求めている。

そのためにはまず「神に対する畏敬の念と罪を怖れる心を培う」ことが、必要であり、ここに「しっかりと心の根を下させてから、ついで真の堅固な信心を实地に生きる力を育てる」としている。「实地に生きる」とは、とりも直さず自分が置かれた場で、なすべき事に心を入れて生きることであり、この生き方と無縁の信心などは、何であれ、「妄想であり、有害な幻覚にしか過ぎぬ」と、「よくよく感じとらせること」が肝要と説いている。<sup>(25)</sup>

伊庭はこの一文の中に驕慢と異端の危険にさらされたサン・シール校の失敗からの反省を見ている。しかしながら、「自分が置かれた場で、なすべき事に心を入れて生きる」という目標には、各人が生きるその時点での自己に対して神が何を望んでいるの

かを問い求めることを本質とする「靈操」の基本精神そのものが端的に示されていると言える。

## 【5】 結語

以上、聖心会を中心に、近代に成立した女子教育修道会とその学校教育に見られるイエズス会教育、特にその人文主義的教育の影響について概観してきた。

まず、【2】節において、一六一―一七世紀に成立した女子教育共同体のいくつかの試みを概観した上で、これらの共同体に共通する特徴として、イエズス会とその教育からの影響、そして女子修道会に課せられた「禁域」への要求との格闘という二点を確認した。

次いで【3】節においては、女子教育がイエズス会に倣い、人文主義的な教育を取り入れるための土台として、「学校」という空間が女子教育の分野で確立する経緯を確認した。具体的には、ベネディクト型修道パラダイムでの修道院における教育から女子学校「教育」が成立し、イエズス会的な人文主義教育を女子教育が取り入れるに至るまでの歩みを、ウルスラ会教育、そして王立サン・シール学校における展開として追ってきた。

その上で、一九世紀初頭にあつて、女子教育学校の伝統の中に男子教育におけるイエズス会学校に倣う道を本格的に採用する

に至った聖心会学校を取り上げ、そこでのイエズス会教育の具体的影響を確認した。近代に成立した教育に従事する修道会は、一般的にその学校教育の内容に関してもイエズス会の教育理念および教育方法から大きな影響を受けていたが、聖心会の教育はこの点において徹底しており、イエズス会学校教育の人文主義的な内容と「靈操」にもとづく靈性とを全面的に取り入れていたのであつた。

## 注

- (1) Françoise Souy-Laveigne, *Chemin d'éducation : sur les traces de Jeanne de Lestonnac, 1556-1640, Chambray-lès-Tours, CLD, 1984* p.115.
- (2) 羽場勝子「女子教育修道会の起源―一六世紀末から一七世紀初めのフランスを中心にして―」（日本カトリック教育学会編『カトリック教育研究』第九号、一九九二年）三七―四一頁。
- (3) 「単式誓願」「盛式誓願」は、簡単に言えば立てた誓願の拘束力の相違を示している。盛式誓願を立てた修道者が正規の修道者とされる。
- (4) コングレガシオン・ドゥ・ノートルダム・ドゥ・モンレアルについては以下を参照。

Patricia Simpson : *Marguerite Bourgeoys et Montréal, 1640-1665*, (McGill-Queen's University Press 1999) , 邦訳パトリシア・シン



- ブソン『マルグリット・ブルジョワとモンレアル 1640-1665年』コングレガシオン・ド・ノートルダムマリア管区、二〇〇八年）
- Patricia Simpson : *Marguerite Bourgeoys et la Congrégation de Notre Dame, 1665-1670*, (McGill-Queen's University Press, 2005), 邦訳『マルグリット・ブルジョワとコングレガシオン・ド・ノートルダム 1665年-1700年』(コングレガシオン・ド・ノートルダムマリア管区、二〇〇九年)。
- (5) 羽場、前掲論文、四四頁。
- (6) 羽場、前掲論文、四二頁。
- (7) 伊庭澄子「聖心会教育の源流を尋ねて―その1ベネディクト大修道院の伝統―」(聖心女子大学カトリック女子教育研究所『カトリック女子教育研究』No.9、二〇〇一年、六〇-六三頁)。
- (8) バラの生涯については以下の評伝が詳しい。  
 フィル・キルロイ著、安達まみ・富原真弓訳『マドレーヌソフイー・バラ キリスト教女子教育に捧げられた燃ゆる心』みすず書房、二〇〇八年。
- (9) 伊庭前掲論文、二〇〇一年、六四頁。
- (10) Jeanne de Charry r.s.c.j., *Histoire des Constitutions de la Société du Sacré-Cœur*, 1979.
- (11) 伊庭澄子「聖心会教育の源流を尋ねて―その3、男子教育の伝統―」(聖心女子大学カトリック女子教育研究所『カトリック女子教育研究』No.12、二〇〇五年、九三頁)。
- (12) 伊庭前掲論文、二〇〇五年、三五頁。
- (13) M-F.Carreel, *L'acte éducatif chez Madeleine-Sophie Barat, Fondatrice de la Société du Sacré Cœur de Jesus*, Lyon 1991.
- (14) ロランがジュヴォンシーの著書『よく学び、よく教える為の方法』を発見した際、「この本が存在している事を知ってさえいたら、何もまた私が、同じことを繰り返し、もう一度書くことはなかったのに……」という形で共感を表明している、という。  
 cf伊庭前掲論文、二〇〇五年、三五頁。
- (15) M.O'Leary, *Education with a Tradition*, University of London Press,1936.
- (16) M-F.Carreel, op.cit.
- (17) 伊庭前掲論文、二〇〇五年、三三頁。
- (18) 『イエズス会学事規程』にもとづくイエズス会学校教育の具体像については、以下の拙稿を参照。  
 拙稿「『イエズス会学事規程』におけるイエズス会学校」(清泉女子大学キリスト教文化研究所年報第一七巻、二〇〇九年)。  
 拙著『キリシタン時代とイエズス会教育―アレッサンドロ・ヴアリニャーノの旅路―』知泉書館、二〇一七年、第二章。
- (19) 伊庭前掲論文、二〇〇五年、三五頁。
- (20) 伊庭前掲論文、二〇〇五年、四〇頁。
- (21) 伊庭前掲論文、二〇〇五年、四九五-五〇頁。

ibid.

(23) (22) 「コンツェルタティオ」などのイエズス会学校における競争的学習方法については、前掲拙稿、32④を参照。

聖心会会憲一八二番。

(25) (24) 伊庭前掲論文、二〇〇五年、七一頁。

(くわばら・なおき 筑波大学人文社会系教授)